

国際地域学部における 「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」の役割

富本 真理子¹、郭 育仁¹

要旨

本稿の目的は、鈴鹿大学における授業科目「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」のこれまでの実践を振り返り、2019年4月に本学に設置される国際地域学部におけるこれら地域志向科目の役割について考察するものである。

地域志向科目「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」は、単なる地域を学ぶだけの機会ではなく、キャリア形成の場として位置付けてきた。これらは、2019年に設置される地域志向性の高い国際地域学部において、あるいは県内高等教育機関連携事業においても、重要性を持つ科目であることがわかる。

鈴鹿大学にとっての国際地域学は、①国内外の地域学に学び、アカデミック志向と生涯学習志向の両方を待つ、②対象となる地域は、一地域に限定されるべきではない、③単なる地域学習ではなく、地域資源活用、地域課題解決等の実践的な活動や、個の主体形成まで広がりを持つ、④大学だけでなく、産業界や行政との協働の取り組みも含む、といった方向性が考えられ、今後も引き続き議論を重ねる必要がある。

キーワード

鈴鹿学, モータースポーツマネジメント, 地域志向科目, 国際地域学部, 地域学

1. はじめに

本稿の目的は、鈴鹿大学における授業科目「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」のこれまでの実践を振り返り、2019年4月に本学に設置される国際地域学部におけるこれら地域志向科目の役割について考察するものである。その過程において、既存の「地域学」に関する論考を整理しながら、「地域」という言葉について考察することで、鈴鹿大学としての「国際地域学」の方向性についても考察する。

鈴鹿大学は2019年4月に国際地域学部を設置する。新設学部等の目的には、「国際地域」という言葉は、『グローバル化した地域』という意味であり、『Think globally, Act locally』という姿勢のもと、グローバルに活躍するが地域の実情に合わせて活動できる人材や、地域に根ざして活動するがグローバルな視野で活躍できる人材を養成するために必要な基礎

¹ 国際人間科学部国際学科

的な概念である。」と記載されている。新しく設置される国際地域学部では、「地域」というキーワードが、現在の国際人間科学部よりも一層強調され、教育、研究に深くかかわってくることは、間違いない。

また、「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」（国際地域学部では「モータースポーツ論」に名称変更予定）は、国際地域学部で新設される「国際地域概論」（1年前期配当）と同様に、地域志向科目として、COC+三重創生ファンタジスタ資格対象科目でもある。

すなわち、新設される国際地域学部の新科目「国際地域概論」とともに、「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」は、新学部の「地域」というキーワードを体現する科目であること、県内高等教育機関の連携で作られた三重創生ファンタジスタ資格対象科目であることという2点で、学内外ともに重要な役割を担うことが予想されるのである。

そのような状況の下、国際人間科学部の既設科目であり、地域志向科目である「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」について、それぞれの科目の担当として関わってきた立場として、今までの経緯と概要を示し、今後のあり方等を含め、広く理解を求めることに本論考の意義を見出したい。

2. 「鈴鹿学」の概要

2.1 「鈴鹿学」開設の経緯と概要

鈴鹿大学では、2015年、「地域に必要とされる大学」をめざし、2014年度から「鈴鹿学」を1年生の必修科目としてスタートさせている。「鈴鹿学」は、鈴鹿市の産業や資源、地域的な特徴等について学ぶリレー形式の地域志向科目である。以下は、講義テーマと講義の到達目標である。

<講義テーマ>

鈴鹿市の地域資源や地域課題をグローバルな視点で理解を深めながら考察し、その活用や解決策を主体的に考えることで地域貢献や、自らの興味やキャリアを考える機会とする。

<講義の到達目標>

- 1 鈴鹿市の地域資源や施策に対する理解を深め、情報収集力を身に付ける
- 2 地域資源の活用方法を考え、主体的に表現することで、提案力を身につける
- 3 地域貢献を通じて自己のキャリアプランにフィードバックする

表1は、講義計画である。毎回、鈴鹿市で活躍されている方をゲストスピーカーとしてお招きし、一つのテーマについてお話しいただくリレー形式の構成となっている。鈴鹿サーキットや伊勢型紙という地域資源をテーマとしたものをはじめ、鈴鹿市内の地域づくりの分野で顕著な活躍をされている方などを招へいする形をとっている。そうそうたるメン

バーがそろい、毎回中身の濃い内容となっている。今年度は、学長や、昨年度の「鈴鹿学」から生まれた地域活動に携わっている学生たちも、ゲストスピーカーとなっている点が新しい。

これだけの方の話の聞けることは、受講生にとっては非常に恵まれた体験であるというのが率直な感想である。また、ゲストスピーカーも、地元の大学で話すことができ、光栄であったとの言葉を頂戴した。

今年度は、受講生による毎回の優秀コメントを鈴鹿大学公式 facebook にアップすることで、アウトプットの一つとして位置付けた。

表1 2018年度「鈴鹿学」概要：テーマと講師一覧
前期水曜日 13時～14時半 於：国際文化ホール

回	日付	内容	講師
1	4/11	オリエンテーション：担当教員紹介、授業の概要、進め方、評価方法	担当教員全員
2	4/18	伊勢型紙：伊勢型紙や地域を元気に～テラコヤ伊勢型紙～	伊勢型紙職人： 木村淳史
3	4/25	鈴鹿の日本酒：鈴鹿の日本酒から、世界の日本酒へ～清水清三郎商店～	清水清三郎商店： 清水慎一郎
4	5/9	鈴鹿市における多文化共生保育	本学非常勤講師： 江藤 明美
5	5/16	モータースポーツ：鈴鹿サーキットの概要	鈴鹿サーキット： 斎田泰之
6	5/23	企業と地域貢献：地域社会と共生し続ける企業であるために～AGF 鈴鹿～	AGF 鈴鹿：中村保幸
7	5/30	大学と地域貢献：大学が地域社会にできること	鈴鹿大学学長： 市野聖治
8	6/6	公民館と地域づくり：大学の近くの公民館の活動	鈴鹿市郡山公民館館長： 山下潔
9	6/13	鈴鹿スイーツとお茶：地域資源を活用し～太門通商・鈴鹿市役所地域資源活用課～	鈴鹿市役所：川北彩夏 太門通商：川原一夫
10	6/20	大黒屋光太夫：漂流地ロシアから苦難の末帰還した光太夫の人生～大黒屋光太夫記念館～	大黒屋光太夫記念館学芸員： 代田美里
11	6/27	鈴鹿市政：鈴鹿市について～鈴鹿市役所総合政策課～	鈴鹿市総合政策課
12	7/4	鈴鹿市の公共交通：	高見ゼミ・鈴鹿市役所都市計画課・伊勢鉄道
13	7/11	鈴鹿市の観光： ～鈴鹿市観光協会～	鈴鹿市観光協会： 古谷洋人
14	7/18	鈴鹿市の防災について	鈴鹿市社会福祉協議会
15	7/25	まとめレポート作成	担当教員全員

2.2 「鈴鹿学」受講生のコメントから

本講義の目的に置いていたのが「学生自身のキャリア形成」である。地域関係科目はともすれば「地元に住んでいないから興味がない」「将来は県外で就職するので関係ない」と、学生から冷ややかな目で見られがちである。この点を払拭できるよう鈴鹿学では、「地域資源の活用」という視点から自らのキャリア形成について考えるよう指導した〔富本他、2017：326-327〕。さて、受講生の反応であるが、「鈴鹿の知らないところを知れてよかった」というコメントが圧倒的であるが、「地域社会で大人たちが地域づくりという活動をしていることを今まで知らなかった」「多文化共生保育の話聞いて、日本の行政の施策は細かいところまで及んでいることに感心した。母国なら、それは個人が解決すべき問題だと考えると思う」「今まで、あたりまえにあるものなので地域のことなど考えたことがなかった。」など、地域社会に目を向けるきっかけになっている。留学生にとっては、日本の社会システムについて知る入口にもなっていると想定できる。

現実社会と向き合い、それを最適な話者が語るという臨場感あふれる内容は、「鈴鹿学」ならではの強みである。

2.3 「鈴鹿学」の成果と課題

本講義の目的に置いていたのが前項で述べた「学生自身のキャリア形成」である。また、地域で活躍するゲストスピーカーをロールモデルとして位置付けることも可能である。それであれば、鈴鹿市の地域資源を活用して、自らの学びへと転換でき、普遍性を高めることができ、アクティブラーニングの好適な材料ともなる。



写真1. 鈴鹿学での学生たちとゲストの交流風景

また、ゲストスピーカー、学生、教員が、交流することで、何かしらの学びや気づきが得られ、その場を共有できたことも大きい。

さらに、学生、地域、教員間でネットワークができた点も評価したい。

例えば、地域との関係でいえば。「鈴鹿スイーツとお茶」で、講義された方々との交流で大学祭の茶会に鈴鹿抹茶を使用することになったことや、抹茶ラベルコンテストを共同

で企画することになったことも成果であろう。また、地域貢献に力をいれている企業とも、大学祭でのコラボ企画が生まれている。公民館の館長には、その後も日本語スピーチコンテストの審査員をお願いしている。「鈴鹿学」を通じて地域と大学の垣根が随分低くなったことに感謝したい。また、教員同志でも学部や専門分野を越えて交流を図ることができ、刺激を受けあつたと考える。

一方で、全学1年全員で実施するため、今後学生数が増加した場合に収容できる場所の確保に頭を悩ますことになろう。また、公開授業となっているため、鈴鹿市民にも更なる門戸を広げたいと考えるが、スペースの関係で人数制限しなければならないという事態も想定できる。

3. 「モータースポーツマネジメント」の概要

3.1 「モータースポーツマネジメント」開設の経緯と概要

本科目の開設経緯については、地域に根ざした鈴鹿大学の教学改革が大きな契機であった。また、鈴鹿市における産学官のネットワークで本科目が、一つの成果として形成されている。本を正せば、「モータースポーツマネジメント」というものは、自動車メーカー、部品メーカー、チューニングチームなどで組織し、レースを通して成績を残すことに目標が置かれるのである。だが、忘れがちなのは、周縁的な存在としてファンである市民レベルの諸活動が、コアな部分すなわちレース活動の一部であるという事実である。こうした中心と周縁の関係性は決して一方的ではない。レースそのものにファンがついてくるように、エンターテインメント性が重視されることにより、お互いの存在が緊張感を醸し出し、モータースポーツ文化を創造している。モータースポーツを現代文化の一つに置き換えてみれば、文化を創造する主体は従来の専門家集団（例えば、レーシングチーム）のみでなくなつたということである。この点こそ、モータースポーツが幅広く受け入れられ、市民の誇れる地元の学として展開しうる可能性が、まだ秘められていると考える。

地域に開かれた大学・鈴鹿大学は、モータースポーツにとどまらず、自動車やバイクと関連した関係者を招き、繋ぎ、アカデミックな学びの転換を図ろうとしている。モータースポーツという横文字をいかに生活者の日常に落とし込み、関心を持ってもらうか、ということである。同時に、それを若い大学生が学び、将来のキャリア形成にどのようなインパクトを与えるか、といった側面も考慮しなければならない。

以下に講義テーマと到達目標を記す。

<講義テーマ>

モータースポーツと地域社会の関係を通して、私たち市民が参画し創造する地域社会の在り方を探る。

<講義の到達目標>

1. モータースポーツに関する基礎知識を身につける。

2. モータースポーツをマネジメントする仕組みを地域社会から身につける。
3. 市民としてモータースポーツを通じて、いかに地域社会に参画、創造しうるかを考察できる。
4. モータースポーツマネジメントに関わる地域の諸課題を自ら発見し、その解決にアプローチする。

表2は、講義計画である。「鈴鹿学」と同様、素晴らしいゲストを招くことができるのも、鈴鹿大学が「モータースポーツの聖地」にあることに起因することは明らかである。市内には、モータースポーツ関係の人材が数多く活躍し、ドライバー、レーサー、メカニック等の現役や経験者が集積している。本学の教員も、モータースポーツの専門ではないが、DVDや、記事などを利用し、アクティブな学びにつながるように、工夫した。残念ながら、昨年、初めて実施した鈴鹿サーキット見学は時間割の都合で実施できなかったが、次年度以降は是非実施したい。

表2 2018年度「モータースポーツマネジメント」概要：テーマ一覧
前期火曜日 10時40分～12時10分 担当教員：郭育仁・富本真理子

	内容	担当者
第1回 4/10	モータースポーツマネジメント論とオリエンテーション： 授業の進め方について説明し、本学で取り組むモータースポーツマネジメントについて理解する。	本学教員： 富本真理子
第2回 第3回 4/17	モータースポーツ文化 モータースポーツの楽しみ方	モータースポーツ研究者： 小林ゆき
第4回 4/24	マン島 TT の事始め	本学教員： 富本真理子
第5回 5/8	モータースポーツとはなにか 基本的な項目を確認する	モータースポーツ友の会：畑川治
第6回 5/16	鈴鹿サーキット×キャリア形成：鈴鹿学と合同？ 鈴鹿サーキット内の各施設の概要について知る。	鈴鹿サーキット： 齋田泰之
第7回 5/22	自動車の産業観光	本学教員： 富本真理子
第8回 5/29	モータースポーツと地域社会（新城）	本学教員： 郭育仁
第9回 6/5	モータースポーツ振興に取り組む産学官連携のあり方： モータースポーツの世界とビジネスのおもしろさ / SUZUKA産学官交流会における鈴鹿大学とのストライダープロジェクトへの取り組み	本学教員： 石川拓次
第10回 6/12	モータースポーツ選手のキャリアを考える	鈴鹿市役所： 西森仁紀

第11回 6/19	鈴鹿市のモータースポーツ政策背景と現状	鈴鹿市役所 ：藤後充輝
第12回 6/26	創造型観光からみるモータースポーツ	本学教員： 郭育仁
第13回 7/3	世界三大スポーツイベントから考えるモータースポーツ	本学教員： 富本真理子
第14回 7/10	鈴鹿オートリサイクルセンター	本学教員： 富本真理子
第15回 7/17	まとめ	本学教員： 郭育仁

3.2 「モータースポーツマネジメント」受講生のコメントから

ここでは、「モータースポーツマネジメント」受講生の期末レポート（2018年前期実施分）を集約することで、学生にとっての本授業の意義について考えたい。

受講生の期末レポートを分析するとその興味は、大きく3つに整理される。それは、①ゲストスピーカーへの興味、②モータースポーツそのものに関する興味、③ビジネスとしてのモータースポーツへの興味、である。

①については、鈴鹿市に所在する大学という強みを活かして、元ライダー、元ドライバーや、モータースポーツ関連事業者等、豪華なゲストスピーカーをお招きしている。彼らは、「モータースポーツの聖地」鈴鹿にある大学で、心血を注いできたモータースポーツに関する講義を行うことについて非常に肯定的な気持ちを抱いていただいております。心から感謝申し上げます。レース参戦経験者であるゲストスピーカーの講義は、特に好評でライフヒストリーに始まり、臨場感あふれるレースの話に非常に刺激を受けたという感想が多い。また「夢を持つこと、夢に向かって努力すること」の大切さに気づいたという記述もあった。

②については、モータースポーツが、チームスポーツであるという点に共感を覚えたという記述がみられた。レースで脚光を浴びるライダーやドライバー以外にも、チーム内では、多くのスタッフ関わっているということを知り、強化運動部の学生が共感を持ったようである。さらには、モータースポーツは、肉体を鍛えて行う競技ということで、スポーツとして再認識したという記載もあった。

③については、ビジネス性が非常に高く、ありとあらゆる分野を巻き込むスポーツである、すなわちすそ野が広いスポーツであるという指摘があった。それは、大企業、個人、地域社会から、国際的なつながりまでもあるということである。この記述に関しては、F1グランプリでスタッフ補助として参加した学生が詳細に記述しており、優れた考察となっている。また、留学生にとっては、鈴鹿サーキット設立の経緯・歴史について、特に親会社の本田技研工業とのつながりを中心に興味が沸いたようである。

しかし、受講生たちは、鈴鹿市におけるモータースポーツの存在の大きさは認めるよう

になったが、一方で市民とモータースポーツの関わりの薄さを指摘している。特に学生にとっては、入場料とアクセスが敷居の高さに起因していると分析している。

3.3 「モータースポーツマネジメント」の成果と課題

モータースポーツマネジメント科目の創設により、モータースポーツに関する知的交流と情報発信のあり方が、もう一つ増えたのではないかと考える。本来は技術系の専門学校でしか学ぶことのできないメカニクスの知識やスキル、レーシングチームを通して学ぶ組織運営やコース戦略は、前述の各分野の専門家の尽力のもとで、この講義で触れることができた。一方で、自動車やバイクにかかわる地場産業、住民団体、地域公共団体の取り組みにもスポットを当て、モータースポーツとしての多様性を発見することができたのではないかと考える。大学所在地の鈴鹿市を例にして言うならば、



写真2. レーシングスーツを見せるゲスト

「モータースポーツ都市」に象徴されるように、サーキットの

みをもって、「まち」そのものを語りきれないところがある。このような講義形式を通して専門性と多様性を一定の程度で整理し、モータースポーツの伝え方、つまり客観的な情報発信を行う役割を果たしているといえよう。大学を拠点として、地と知の縁が結ばれ、モータースポーツの新境地を切り開く地域力を形成していることだ。この文脈でいくと、モータースポーツを地域の文化として捉えて差し支えがないだろう。地縁と知縁によって結ばれた「社会」がその文化を再生産する役割を担い、またその自覚を持たなければならない。

地域社会との協働でモータースポーツ講座の魅力をあげている例を述べる。世界最高峰のレース・フォーミュラ1の運営に優秀な学生スタッフを送り込む選考が産学連携のもとで行われた。前例のない鈴鹿市内の公道パレートを充てられるボランティア・スタッフ（鈴

鹿モータースポーツフェスティバル)にも、あいにく、台風の影響のため当該パレードは中止となったものの受講生から20名近くの希望者があった。モータースポーツを手に届くかたちで、若者の学びに達成感と実感を与えたと同時に、地域とつながったのではないかと考える。今後もなお継続して、このモータースポーツをいかに噛み砕き、鈴鹿の文化として定着し、大学の教学の魅力をブラッシュアップさせていくことに取り組む必要がある。

授業科目「モータースポーツマネジメント」は、核となる「モータースポーツ」の特殊性を踏まえた上で、地域社会との関係を重視した内容であったこと、すなわち、モータースポーツ鈴鹿の地域資源の一つとして捉えて学びの方向性を見出していることに注目したい。

4. 国際地域学と地域学の関係

4.1 国際地域学部設置の理念と国際地域学について

前項までで述べてきた「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」が、新設される国際地域学部でどのような役割を果たすのかを考察するために、国際地域学について若干の考察を試みたい。

鈴鹿大学国際地域学部国際地域学科の基本計画書における「新設学部等の目的」には、以下のように記載されている。

【新設学部等の目的】

国際地域学部は、「Think globally, Act locally」を理念とし、グローバル化する地域社会の課題をビジネスや文化（理解力）で解決できる人材を養成する。

国際地域という言葉は、「グローバル化した地域」という意味であり、「Think globally, Act locally」という姿勢のもと、グローバルに活躍するが地域の実情に合わせて活動できる人材や、地域に根ざして活動するがグローバルな視野で活躍できる人材を養成するために必要な基礎的な概念である。

これまでの国際人間科学部は、国際学と人間科学の諸分野において、学際的な教育研究を行うことにより、専門的な知識と豊かな教養、広い視野と柔軟な思考力をもった人材を育成し、ビジネス、ホスピタリティやウェルネスを含めた分野で国際社会と地域社会の発展に寄与することを目的としてきた。今後は、グローバル化する地域社会が抱える、都市化、地方分権化、資源循環化、少子高齢化、国際化、情報化という今日の課題を、「地域」から解決策へとアプローチすることに重心を移していく。そして、この社会の流れに対応する哲学をもち、さらに現場主義を実践する学問として、領域横断的な国際地域学の構築を目指して国際社会と地域社会のさらなる発展に寄与していきたい。なお、学位の分野、教員組織等に変更はない。

【教育目標】（「Think globally, Act locally」を理念とし、）グローバル化する地域社会

の課題をビジネスや文化（理解力）で解決できる人材を養成する。

現「国際人間科学部」が「国際地域学部」に改組される課程において、議論された論点を以下にあげる。教育目標にある、「グローバル化する地域社会」とは。鈴鹿市なのか、三重県の中北勢部なのか、あるいは海外の特定地域を指すのか等、教員の専門分野によりかなりの認識の違いが現れた。

また、「国際地域」については、「Think globally, Act locally」という理念から「グローバル」という意味をこめているのであるが、グローバル学部とするには、抵抗があるので、「国際地域学部」とした。なぜ今「国際」と「地域」なのかという点を高校生にもっとわかりやすく伝えるべきではないかと考える。

ところで、国際地域学部を持つ大学は、2018年時点で、インターネットで検索すると、東洋大学（2016年度入試をもって募集を停止し、「国際学部」へ発展的改組）新潟県立大学、福井大学がヒットする。多くはないものの、稀な名称ではないことがわかる。

岩崎保道〔2016：136〕よれば、地域学系学部は、1996年に高崎大学において地域政策学部が設置されたことに始まり、2000年代になり、公私立大学での設置が相次いだという（表3 参照）。近年では、国立大学において2016年度に設置予定のものが目立ち、その背景には、「地（知）の拠点整備事業」（いわゆる大学COC事業）の支援を受けた影響が少なからずあるとし、政策的支援が契機となった事例が多いと指摘している。

表3. 地域学系に関する学部

	大学名、学部等名（開設年度）
国立大学	宇都宮大学 地域デザイン科学部（2016※） 福井大学 国際地域学部（2016※） 愛媛大学 社会共創学部（2016※） 宮崎大学 地域資源創成学部（2016※） 高知大学 地域協働学部（2015） 金沢大学 人間社会学域地域創造学類（2008） 山形大学 地域教育文化学部（2005） 鳥取大学 地域学部（2004） 岐阜大学 地域科学部（1997）
公立大学	新潟県立大学 国際地域学部（2009） 奈良県立大学 地域創造学部（2001） 高崎大学 地域政策学部（1996）
私立大学	追手門学院大学 地域創造学部（2015） 愛知大学 地域政策学部（2011） 富山国際大学 地域学部（2000） 東洋大学 国際地域学部（1997） ※2016はすべて予定

出典：岩崎，2016：136

全体的には、学問領域の特殊性からか、社会的要請も大きい地方都市に立地する大学が圧倒的に多い。また、“国際”や“政策”などの要素が加味された学部もあると述べている。

「国際地域学部」も「地域学部」系に属するようである。

鈴鹿大学は、いうまでもなく国立大学ではないが、地方都市に立地するという意味では、

社会的要請にも応えているといえる。前述のように、決して新しい挑戦というわけではなく、これら先駆的な取り組みから学び、いかに鈴鹿大学としての「国際地域学部」に特色を持たせ、地域にアピールできるかが問われていると言えよう。

4.1.1 「地域」とは、何をさすか

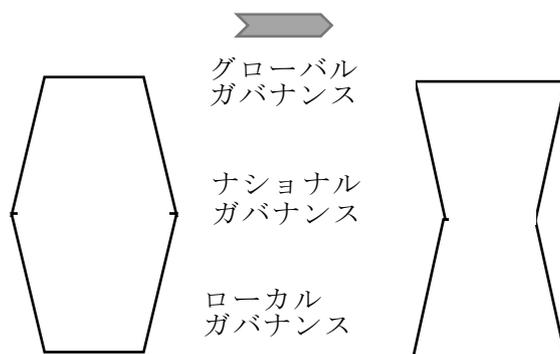
国際地域学部設立にむけての議論の過程で、「地域」という言葉の曖昧さが議論された。前項の各大学の教育目標には、「国際的視野に立った地域づくり」「地域や国際社会」「地域・国内・世界」「グローバル化された社会」「国内外の地域」「国際的に活躍するとともに、地方におけるグローバル化への対応能力」等の表現がある。それらから、総合的に判断すると、世界各国のあらゆる「地域」、日本国内のあらゆる「地域」、当該大学の立地する周辺の「地域」という、「あらゆる地域」が対象となり、「地域」の概念は非常に漠然としてくる。

この点については、次項で取り上げる地域科学の創始者として知られるアメリカの経済学者、平和学者のアイサード（Walter Isard、1919年～2010年）が、地域について、「何が有意味な地域（meaningful region）であるかは、われわれがどのような特定の社会問題に関与するかによって左右される（Isard, 1975 青木訳, 2000: 21）」と述べている点を参考としたい。すなわち、「解決を要する問題が存在するところが「地域」（柳原, 2011: p22）」というのが、現実的ではないかと考える。

4.1.2 なぜ「国際」と「地域」なのか

「国家」あるいは「national」という言葉について触れることで、「国際」「地域」、あるいは「global」「local」という言葉の関わりについて若干の手がかりをあげたい。野田邦弘は〔野田, 2016: 254-255〕、今世紀に入り、国家の役割は、弱まっていると指摘している。それは、国内的には、官僚制的中央集権国家が解体・再編され、分権型社会への模索が始まったこと、国際的には、グローバル経済問題や地球環境問題といった国家の枠を超えて対応すべき課題が増加するなかで、EU、G20などのグローバルガバナンスの試みが始まっていることを理由としている。すなわち、「これまで国家が果たしてきた役割が相対的に低下し、一方では分権化の推進による地域主義かと他方での国家を超えたグローバルな取り組みの重要性が増してきた」と述べている。それをイメージしたものが図1である。

この指摘を踏まえると、国際地域学というのは、グローバルな時代変化に呼応したものであり、地域再生は、言うまでもなく、国家に頼るのではなく、地域が主体であると理解できる。また、国際化の進展が、国家の役割を弱め、地域の役割、存在感を高めたという点も、改めて確認しておきたい点である。



出典：野田邦弘 2016「第11章アートが地域を再生する」柳原ほか編著『地域学入門』，ミネルヴァ書房，p.255

図1：ガバナンスの変化

4.2 地域学について

次に、地域学について考察したい。前述の岩崎が〔2016：136〕、国際地域学は、地域学系の中で、“国際”や“政策”などの要素が加味されたという指摘によるからである。

ここで、「地域学」についての学問としての沿革、方向性について述べてみることにし、「地域」をどのように考えるかという問いの答えが浮かび上がってくると考える。

表4：地域学2つの方向性

	名称	備考
国際的地域学	「地域科学」 Regional Science	Walter Isard、平和学 人々の生活重視、 地域固有の人間環境や文化遺産に根差した経済 発展
	「エリア・スタデ ィーズ」 Area Studies	国家単位が対象であり、国内地域は対象外 世界戦略に沿った国外の地域研究と、市場経済化 の動きを重視、冷戦体制の中「敵」の研究
国内的地域学	「地域学」	特定の意味を持った地名に「学」が、合体。 生涯学習から出発①地域研究としての地域学② 地域学習としての地域学③運動としての地域学
	「地元学」	いずれの地域でも「地元学」

出典：
柳原邦光ほか編著〔2011〕、廣瀬隆人〔2007〕、根本祐二〔2005〕、中元崇、久保田千雅子〔2007〕をもとに、筆者作成

地域学の方向性としては、二つあるという〔柳原ほか，2016：22-24〕〔廣瀬，2007：48〕〔根本，2005：1〕（表4）。一つは、海外にルーツがある「地域学」であり、伝統的でアカデミックな蓄積がある。もう一つは、日本国内で生涯学習の一環として発展してきた「地域学」である。

海外にルーツがある「地域学」を根本祐二〔2005：2〕は、便宜上、「国際的地域学」と呼び、「植民地や敵国という『見知らぬ異国』の研究に端を発したが故に海外の地域を対象にただけであり、その本質は、総合的な学問体系を構築するための基礎研究かつ、その成果を応用するための具体的なフィールドの提供にある」と述べている。また、日本国

内で、発展した「地域学」を、根本 [2005:3] は、「国内的地域学」主に<生涯学習>の分野で実践されているところが特徴であると指摘している。生涯学習である以上その対象はもっとも身近な自地域が優先されるので、対象が国内に限定されやすいとも述べている。

これら、2つの地域学は、非常に異なるようにとれるが、それらの統合により、シナジー効果を期待するという根本の主張に鈴鹿大学の国際地域学部の方向性を重ねながら以下考察したい。

もうひとつ、海外にルーツがあるものの中で、ウォルター・アイサードの「地域科学」(Regional Science)がある。1960年以降、それまでの経済優先主義の批判から、人々の生活重視と地域への意識の高まりがみられ、経済発展も、地域固有の人間環境や文化遺産に根差すべきものであり、人間と自然との関係、人間相互の関係という観点から、西欧社会の行動原理を見直すべきであるという主張がされた。このアイサードの「地域科学」は、後述する日本にルーツをもつ「地域学」「地元学」のように近代化・都市化への警鐘という共通項があり、前述の同じく海外がルーツでも国家の存在を重視する Area Studies とは、性質が異なる。しかし、この「地域科学」は、その後、東西陣営という構図において、国家単位で考える Area Studies というアメリカの世界戦略に沿った国外の地域研究(日本研究、ソ連研究、東南アジア研究、ラテンアメリカ研究等)の流れと、市場経済化の動きに呑み込まれたという [柳原ほか, 2016:22-24]。

これら、国際的地域学は、方法論として学術性の高い基礎研究としての蓄積があり、具体的かつ、固有の特性を持つ場の必要性を示したという点は、参照に値するし、それは国内地域学にも活かされていくべきであると考ええる。

一方、もう一つの方向性として、日本国内にそのルーツがあり、展開を遂げている「地域学/地元学」がある。廣瀬 [2006:85-87] は、地域学・地元学提唱の背景は、情報化・グローバル化する社会の中での都市型の普遍的な生活文化が風土に適合した伝統的な生活様式を駆逐するという危機意識があると述べている。

なお、「地元学」は、地域学とほぼ同じ意味を持ち、特定の地域名は冠さない。水俣から吉本哲郎 [2001]、仙台がフィールドの結城登美雄 [2009:2]、地域経済が専門の下平尾勲 [2006] らが「地元学」を提唱している。

地域学についての明確な定義には、中路正恒 [2010:14] の「地域学はまずもって地域を学ぶことである。そして、更にはその学びによって海のかなたからやってくるグローバルな様々な波に対して途に困惑することのないような明確な自覚された生き方を身に着けてゆくことを目指すものなのである。」がある。

さらに、以下の廣瀬隆人の「地域学」の分析も明確である [2007:48]。

- ・「地域・地元」は、日本の多様な地域と人々の姿を映し出すものであるとともに、文化事象における「中央」との対立軸の中でその存在を主張する。

- ・地域学とは、他と区別される一定の空間とそれを共有する人々の暮らしから生まれる

社会的特徴をテーマとして行われる調査研究活動とそれを基礎として学習活動、及びそれを資源として行われる地域づくりの諸活動をさす。いわば、地域を知る、理解するための学習機会や地域を科学的に把握する体系を意味する。

・地域学は、地域を構成する諸要素や地域課題の科学的・体系的把握のための調査研究活動であり、結果として科学的・客観的な視点を獲得し、グローバルな視野で自らの地域の座標を見極めることが求められる。同時に、そこの住む人々が主体となるが、研究者や民間企業、行政関係者と協働して進められる場合もある。

・地域学は、科学性・総合性と、地域づくりのインセンティブがあり、最終的には、学習者の主体形成にある。

ひとつひとつに、言及するのは避けるが、「地域」対「中央」という構造、学習活動、地域づくり活動であり、それらを科学的に把握する体系、最終的には、学習者の主体形成という点が、非常に大学教育となじむと考えられる。

また、以上の取り組みをざっくりと整理したのが、中元崇と久保田千雅子らの論考である[2007]。地域学を①地域研究としての地域学②地域学習としての地域学③運動としての地域学、という取り組みの面から三つに分類している。

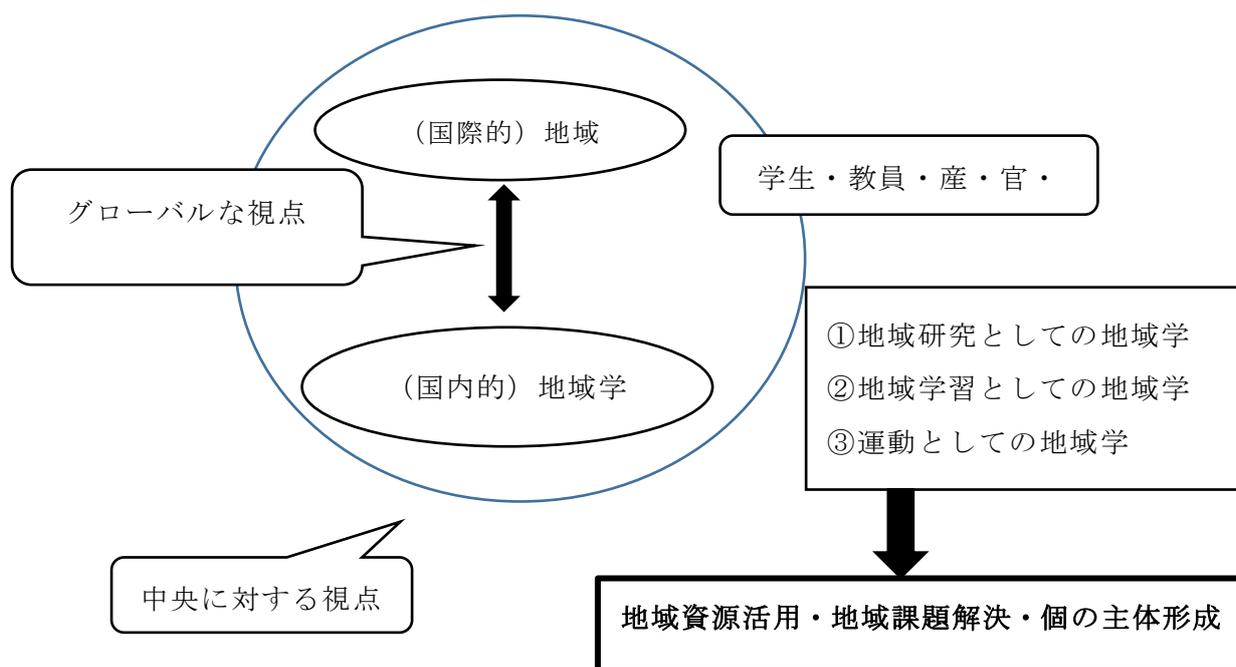


図2. 国際地域学の概念（案）：鈴鹿大学版

以上、2つの「地域学」の概観について述べたが、それらを統合することで、鈴鹿大学の伝統を活かした国際地域学について一つの想定される方向性を以下にまとめる。また、イメージ案は図2に表した。

・国内外の地域学に学び、アカデミック志向と生涯学習志向の両方を待つ。

- ・対象となる地域は、1地域に限定されるべきではない。
- ・単なる地域学習ではなく、地域資源活用、地域課題解決等の実践的な活動や、個の主体形成まで広がりを持つ。
- ・大学だけでなく、産業界や行政との協働の取り組みも含む。

5. 地域志向科目の役割

5.1 国際地域学部において

さて、本論文のキーワードである「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」の役割について論じていきたい。これら2科目は、既存の鈴鹿大学独自の科目であり、地域というキーワードに深く関わっている。

前述したように、「鈴鹿学」では、「地域資源の活用」という視点から自らのキャリア形成について考えるよう指導したことや、地域で活躍するゲストスピーカーをキャリア形成や人生のロールモデルとして位置付けることで地域資源を普遍化できる科目として位置付けた。「鈴鹿学」は、地域を学ぶ場であり、主体形成できる場である。

一方で「モータースポーツマネジメント」では、核なる「モータースポーツ」の特殊性は踏まえた上で、地域社会との関係を重視した内容であったこと、すなわち、鈴鹿の地域資源の一つとして捉えて、学びを深化し、広がりも見せている。

鈴鹿大学は、2015年4月1日に「鈴鹿国際大学」から「鈴鹿大学」へ名称変更した。伊勢新聞（2015年12月20日）は、後日、一連の特集の一つとして、「より地域に必要とされる大学」、「『地域に役立つ大学』へ」、「『地域密着型』への取り組みを始めた鈴鹿大学」というフレーズを織り込み取り上げている。

注目したいのは、記者会見（2015年3月17日）で、鈴鹿大学学長市野聖治が「『国際』は突き詰めると地域との融合につながる。『地域の役に立つ大学』を表すために名称変更を決めた」「『鈴鹿で学べること』に力点を置いて考えていきたい」と述べた点だ。

特に、地域志向の授業科目「鈴鹿学」や「モータースポーツマネジメント」を開講したことに触れ、後者については、「モータースポーツを地元でどう盛り上げていくかについて考える」と説明している。

国際人間科学部より、国際地域学部に改組になったことで、その名称から、より一層『地域に役立つ大学』『地域密着型』志向が強化され、同時に地域志向科目である「鈴鹿学」や「モータースポーツマネジメント」は、より一層その重要度が増すであろう。

5.2 対外的な場面における地域志向科目

ところで、「地域志向科目は、地域を知り、地域の課題を発見し、解決策を提案し、実践に取り組む科目」（鳥取大学 HP: <http://www.coc.tottori-u.ac.jp/5827>）とされている。

文部科学省では、平成27年度から、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することで、地方創生の中

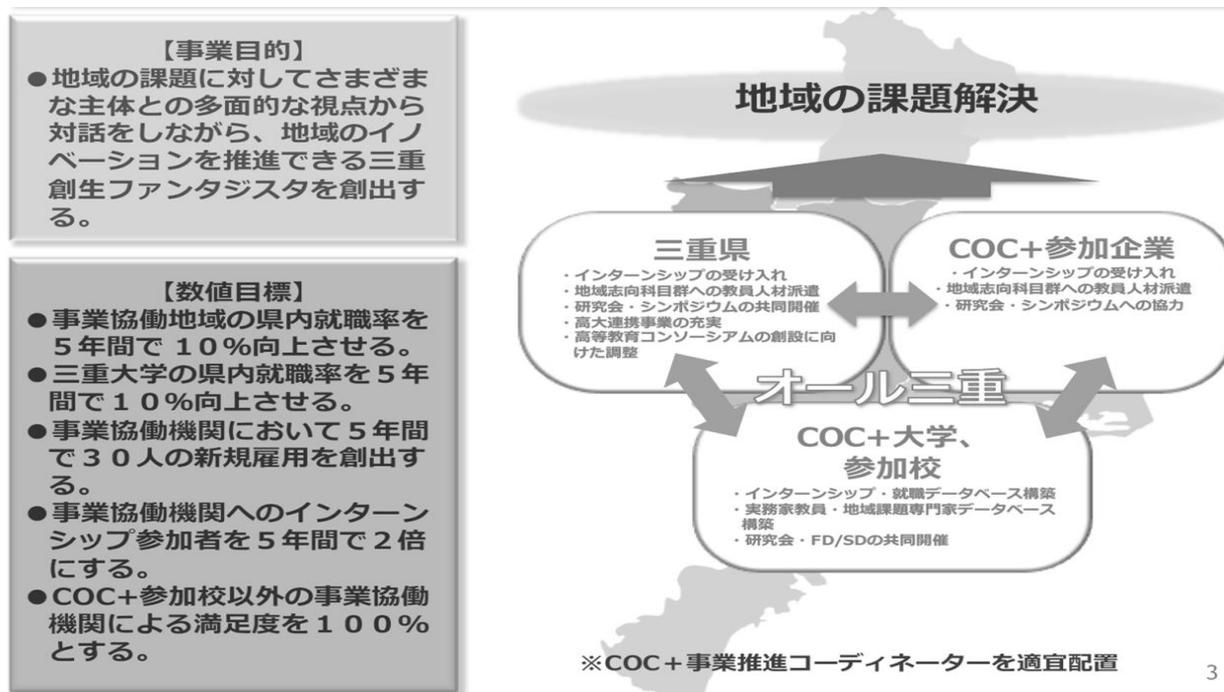


図3. 地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成。

出典：三重大学ウェブサイト <http://www.cocpls.mie-u.ac.jp/about/>

心となる「ひと」の地方への集積を目的として「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」を実施している〔文部科学省ウェブサイト：

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/〕。

この事業において、2015年、三重大学の提案する地方創生推進事業『地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成』が採択されている（図3）。なお、この事業は、三重県内の高等教育機関と三重県の産官の連携で実施されている。

鈴鹿大学でも、この「三重創生ファンタジスタ」資格取得のために、地域志向科目として現在、「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」等が登録されている。今後、新学部の科目も、地域志向科目として追加登録する必要があるだろう。県内の高等教育機関連携事業のつなぎ役としての地域志向科目がある。

5.3 小括

以上みてきたように、「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」のような地域志向科目は、地域資源・地域課題とそれに関わる地域の人々を核として展開している。それらをよく知り、活用策、解決策を提案、実践していく中で、図4のようにその実践者にとっ

て、様々な効果が考えられる。しかし、それら地域志向科目が、教室の中で単なる座学であるならばその効果は限定的である。地域資源・地域課題とそれに取り組みむ地域の人々との動的な関わり、実践においてはじめて我々、大学や学生に様々なメリットがあり、それと同様に地域への波及効果もあれば幸いである。また、その過程において、グローバルな視点、中央に対する視点や、大学らしい知が加わることで、新たな展開も期待できる。地域志向科目は、そういった静的・動的な取り組み、学問的・生涯学習的な蓄積、グローバルな視点・草の根の視点、地域・中央という対抗軸の認識など、対立概念の調和の上に総合的な知の集積を要するものではないかと考えられる。これは、あくまでも、理想論であり、現実には、そこまで到底たどり着かずに、試行錯誤の状態ではある。今後も、学内でなお一層の議論の継続が望まれる。

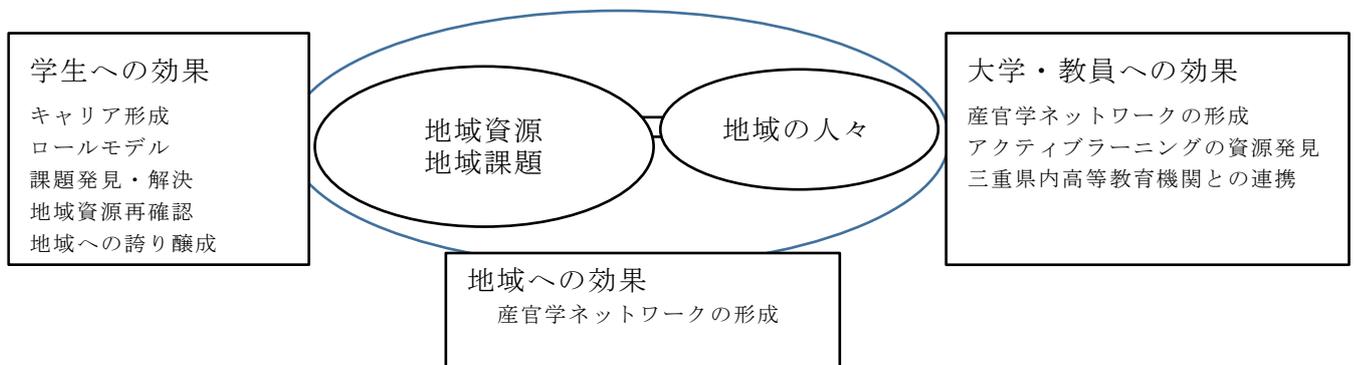


図4. 地域志向科目の効果イメージ

6. まとめ

鈴鹿大学で既設の地域志向科目「鈴鹿学」「モータースポーツマネジメント」は、単なる地域学習の機会ではなく、キャリア形成や、地域で活躍するゲストスピーカーをロールモデルとして位置付け学ぶ場として位置付けてきた。すなわち、鈴鹿市の地域資源を活用して、自らの学びへと転換でき、普遍性をたかめることができ、アクティブラーニングの好適な材料ともなった。さらには、学生が地域資源の活用方法や課題解決策を提案し、地域の人々と協働で実践していけるまでになることが理想形であろう。

また、これら鈴鹿大学の地域志向科目は、国際人間科学部から国際地域学部へと改組することで、地域志向の性格を強めていくことから、より一層その重要度が増すと考えられる。さらに、三重県内の高等教育機関連携事業である三重創生ファンタジスタ資格の認定科目としても、重要な意味を持っている。

鈴鹿大学にとっての「国際地域学」は、アカデミックな要素をベースに置きながらも、学生の主体形成を進める場であることが前提である。対象とする地域は、必然的に大学が

所在する鈴鹿市またはその周辺をさすことが自然であるが、しかし、留学生や国外を研究フィールドとする教員の存在を鑑みれば、それは鈴鹿市に限定されるべきではないであろう。私たちは、「地域」という言葉のあいまいさを乗り越えて、「解決を要する問題が存在するところが「地域」（柳原，2011：p22）」と前向きにとらえることが、現実的ではないかと考える。今までに展開された論考から、単に地域学習に終わらず、地域資源活用・地域課題解決や個の主体形成までも含む総合的な科目であるべきことがわかった。さらに、大学だけでなく、産業界や行政との協働の取り組みも求められることになるだろう。

2019年度に開設される鈴鹿大学国際地域学部は、現在以上に、より地域志向の高い学部をめざしている。学部設立過程で、いかなる地域学を意識した国際地域学部構想があったのか今となってはわからないし、地域の定義も結論をみないままであった。しかし、地域学を意識するなら、また、特に、日本で発展してきた地域学の系譜からみれば、それはもう座学のみではなく、現場に出て、現場を知り、地域の様々な方々と協働で実践する。そういった意識を教員、学生が共有することが求められていることではないかと考える。

参考文献

Grimes, William (NOV. 10, 2010). "Walter Isard, Economist Who Studied How Regions Evolve, Dies at 91". New York Times
https://www.nytimes.com/2010/11/11/business/economy/11isard.html?_r=2&src=twrhp%7Ctitle=Walter 2018年9月22日閲覧

廣瀬 隆人

2006「地域学・地元学の現状と展望：その分類学的考察」『東北学』(6), 72-88

2007「地域学に内在する可能性と危うさ」『都市問題』98(1), 48-56

2008-09「ローカルな知としての地域学」『日本の社会教育』日本社会教育学会年報
編集委員会編 52, 39-49

Isard, Walter

1975, *Introduction to Regional Science*, New Jersey U.S.A, Printice-Hall [青木外志夫、西岡久雄監訳2000]：『地域科学入門（I）』大明堂

岩崎保道

2016「国立大学における地域学系学部の動向－国立大学改革を背景として－」『関西大学高等教育研究』(7), 135-141

郭 育仁， 富本 真理子， 村瀬 慶紀

2016「鈴鹿大学観光ビジネス領域における『モータースポーツマネジメント』の取り組みと課題」鈴鹿大学紀要 = Suzuka University journal : campana (23), 201-212

三重大学 HP : <http://www.mie-u.ac.jp/topics/university/2015/10/-coc.html>

2015年10月02日「文部科学省 「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」
に採択されました」

中路正恒

2006「地域学とは何か」東北芸術工科大学東北文化センター『季刊東北学』6:48-57
Isard, Walter, 1975, *Introduction to Regional Science*(=2000, 青木外志夫監訳『地
域科学入門』大明堂)

2010「地域学の基本問題」京都造形芸術大学編『地域学への招待改定新版』角川学芸
出版、12-23

中元 崇, 久保田 千雅子

2007「『京都学』のプラットフォームを築く--大学コンソーシアム京都の取り組み(特集
2 いま、地域学は)」『都市問題』98(1), 68-73

根本 祐二

2005「地域間競争と地域学の今日的役割」『地域開発』494:1-5

野田 邦弘

2016「第11章 アートが地域を再生する」柳原ほか編著『地域学入門』, ミネルヴァ
書房, 254-269

光多 長音

2016「第2章 地域主義の系譜と地域学」柳原ほか編著『地域学入門』, ミネルヴァ書
房, 29-40

文部科学省 高等教育局 大学振興課「平成26年度「地(知)の拠点整備事業」公募に係
る平成25年度からの変更点について」2016年

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/_icsFiles/afieldfile/2014/01/22/1343245_02_1.pdf#search=%27E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%BF%97%E5%90%91%E7%A7%91%E7%9B%AE+%E8%83%8C%E6%99%AF%27 2018年9月22日閲覧

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」について

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ 2018年9月22日閲覧

下平尾 勲

2006『地元学のすすめ:地域再生の王道は足元にあり』, 新評論

太平洋学術研究連絡委員会 地域学研究専門委員会報告

2000「地域学の推進の必要性についての提言」

http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/17htm/17_43.html 2018年9月22日閲覧

富本 真理子, 郭 育仁

2018「2017年度鈴鹿大学授業科目『モータースポーツマネジメント』の取り組みと課
題: 大学としての地域貢献の視点から」鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要. 人文科
学・社会科学編 = Journal of Suzuka University and Suzuka Junior College. 鈴鹿大

学・鈴鹿大学短期大学部紀要編集委員会 編 (1), 289-307

富本真理子・藤岡恭子・榎原尉津子・高井和男・前澤いすず・高見啓一

2018「学生と地域のWIN-WIN関係をつくる「鈴鹿学2017」の取り組み」『鈴鹿大学・
鈴鹿大学短期大学部紀要．人文科学・社会科学編』(1), 309-331

鳥取大学 HP: <http://www.coc.tottori-u.ac.jp/5827> 2018年9月22日閲覧

内田 樹

2018『ローカリズム宣言：〈成長〉から〈定常〉へ』デコ

柳原 邦光、光多 長音、家中 茂、中野 誠編著

2011『地域学入門：〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房

柳原邦光

2016「第1章 いまなぜ地域を考えるのか」柳原ほか編著『地域学入門』，ミネルヴァ
書房，12-24

横山 幸司

2014「生涯学習の視点から考える地域学の意義と 今後の展望についての一考察」
滋賀大学社会連携研究センター報 (No. 2), 106-117

吉本 哲郎

2001『現代農業五月増刊 地域から変わる日本 地元学とは何か』，農文協

2008『地元学をはじめよう』，岩波ジュニア新書

結城 登美雄

2009『地元学からの出発：この土地を生きた人びととの声に耳を傾ける』，農産漁村
文化協会

国際人間科学部国際学科 tomimotom@m.suzuka-iu.ac.jp

The Role of "Suzuka-Gaku" and "Motor Sports Management" In the Faculty of Regional Development Studies

Mariko TOMIMOTO, Ikujin KAKU

Keyword

"Suzuka-Gaku", "Motor Sports Management", region-oriented subjects, Faculty of Regional Development Studies, Region Studies

